双空の誓い

双空

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
双空の誓い

【Ｎコード】
Ｎ６４２５Ａ

【作者名】
双空

【あらすじ】
何も考えず、ただ１日１日を過ごすだけの世界その世界に起きた出来事の物語

序章

序章
「世界　乱れし時　肩に十字を持つ少女のもとへ　翼をかざす者集わん
彼ら　彼の少女の　右腕　左腕の中心に　想いをのせた剣をたてん
その苦しみを　こえし時　最後の剣が　彼の少女の　心　をつき
その後　世界は　正しき　道へ　向かわん」

時は　H・T（ホーエン・テトラ）暦89年

この世界は“時”を刻んでいた

争いもなく、ただ1日1日を過ごしている人々が、この星にはいた

生きがいという生きがいを持っているものは少なく

ただ、のうのうと過ごしている

だから争いもない

そんな世の中も　少しずつ　少しずつ　変わっていた

この世界に不満を持ち　変革を起こそうとする者がいる

『人は何のために生きているのか？』

『誰のために生まれてきたのか？』

そんなことを考え、自分なりの“答え（みち）”を見つけたものが、
同志を探し、集め

世界を正しく、自分達に道を、と。

しかし、他の人は知らない

知りようもない

自分を取り巻く世界を変えるような出来事が

今、始まるということを・・・・。

第1章（前書き）

えっと・・・・
投稿失敗しまくってます・・・・
なれないといけないのですが。。。。
すいませんｏｒｚ

第1章

彼は覚えているだろうか
私と語ったあの時を
彼は今も考えているだろうか
私が尋ねた質問を
そして・・・彼は・・・
守ってくれるのだろうか
私と交わした約束を・・・・。

少年は走っていた。
静かな森の中を、光のささないくらい闇の中を走っていた。
息をきらしながらも、とまることなく、体に負う重荷にもかまわずに。
急な坂も、細く険しい細道までもとまらずに。
徐々に体を、体力を蝕む怪我という重荷を背負いながらずっと走っている。

少しでも離れるために、少しでも生きているという実感を得るために・・・・。

だから彼は止まろうとしない。止まれないのだ。

少年に迫り来るものがある限り、少年は止まらず走り続けるだろ。

自分のために、彼は走った、走りに走った。

しかし気づいてみれば、彼の右腕は肩から赤い血を流しながら、無くなっていた。

彼の息はさらに荒くなる。

それでも走った。

徐々に失う”体(いのち)”を守るために・・・。

次第に彼の腕は左手までも同じようになくなっているのだった。

腕だけではない・・・。

耳も足もなくなっている。

彼の意識だけが、体を置いて走っていく。

森の向こうへ、この場所から、早々と・・・。

そして・・・、彼の意識はなくなっているのだった・・・・。

その、彼がいた場所のそばには、赤い”丸い点”のついた大木が横たわっている。

その横に、少年のものと思われる、血のついた衣類があるだけだった・・・・。

第1章（2）（前書き）

少年は走った
自分のために走った。
その少年の命は何者かに狙われ、
そして、失うのだった・・・・

第1章（2）

そして、森は静かなままだ。

何が、おきていたことも、何もおきていなかったかのように消してしまう。

例え、何かが起きたのだとしても、この大きな森はそれをも隠す。

何もなかったかのように・・・・・

この星の夕日はきれいに見れた。

建物が少ないおかげだ。

その夕日の下にある店でこんな話があっていた。

「また一人、あの森で消えたらしい。

端整（たんせい）な顔立ちの若者は言った。

「またかぁ？それで今度はどこの誰が消えたんだ？」

その若者と話していた小さな小人と思える人は、なぜか笑いを含めた顔できいている。

「どうやら、隣町の出身の青年らしい。数日前に、もうすぐ家に帰

ると親に連絡していたらしいのだが

何日たっても、帰ってこなかったそうだ。それで、心配になった親が、知り合いなどに頼んで、近くまで着てないか

探しにいってもらったそうなのだが、見つかったのは血のついた衣類があったらしい。」

「それで、どうしてその青年の者とわかったのだ？」

少し興味をもったらしい

「何でも、その衣類は、母親がその青年の旅立つ日に渡したものだったらしい。」

「近頃、魔物とかいわれてるやつがいるらしいからねぇ。」

なんとも間の抜けた声だ。

「らしいな。まぁ、俺たちには関係ないだろうけどな。そういえばさ、この間話していた・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

彼等は全くの人事だと言わんばかりに話をかえ、楽しげに語り、笑っていた。

彼等にとってどうでもいいことなのだろう。

感性が乏しいのかもしれない。

人としての大切な物が欠けているということは、

とても悲しいことかもしれない・・・・。

第1章（2）（後書き）

え～っと
ゲームシナリオを書くことになった
書いてるんですが・・・・
いいのでしょうか・・・・

第1章（3）（前書き）

夕日の下の店
その店で若者たちは話していた
しかし　どこかかけている
感性というものがかけているのは悲しいものだ・・・

第1章（3）

その二人の近くにいた青年は聞いていたが、

どうでもいいことだと、この青年も思っている

この青年だけではない、周りにいる人々もそうだ、自分でなければ

それでいい

ただそれだけのことだろう

きちんと”考える”ということができるのなら

この星の人々はもっと活気付いていると思う

”考える”ことは当たり前だけれど、当たり前とは思ってはいけない

いのかもしれない・・・・・

そうしているうちに、日は暮れた

夜空は暗い、この星の人々の心のように・・・・・

そんな夜が明け始めたころ、あの森に人がいた

彼の髪は森林の緑を映したような綺麗な緑、背は１７０センチメートルほどであるが肉つきはいい

彼は目が悪いのか、癖なのかはわからないが、
右目をふさいでいる
左目は目の色が透き通った青色を映し出す
そして彼は、肩に荷を背負いのんびりと歩いている
彼の進む先は、少し暗く、少し霧が出て不気味さをかもし出す
薄気味悪いといえば、悪いのだがその中をまっすぐ進む
湿気もでてきた
この中を彼はのんびり歩いているのだから、結構な肝っ玉である
普通は急ぎ足になるか、駆け出しているところだ
しかし彼はそうしない
自分のペースでゆっくり進む
その彼の前に”何か”が木の枝から垂れ下がってきた
一見するとただの枝だが
その”枝のようなもの”は垂れ下がって来るのだ
次の瞬間、地面を向いていた先が

彼の方向に向き

口らしき先端が彼めがけ、突っ込んでくる

彼は驚き、焦り、ゾッとした

得体の知れない”枝のようなもの”が自分めがけて飛び掛ってきたのだ

『怖い』　彼ははじめてそう思い

反射的に身をそらす

ぎりぎりのところでかわしたが、何かが顔をかすめたのか

彼の顔から血がたれ、地面に落ちた

彼は”枝のようなもの”が飛んでいった方向へ視線を向けた時

見た光景は、それが彼の”血”が付いた地面に飛びつき

その”血”の付いた部分を先端で”食った”のだ

血の付いた部分がなくなると、その”枝のようなもの”が少し大きくなる

そしてまた、彼を向き先端をあけている

彼の背中は、汗でびしょびしょに濡れている

彼ははじめて知った　『恐怖』　に耐え切れず

荷物を捨てさり走り出した

さっきまでの彼とは違い、『恐怖』に駆られる彼の顔は蒼白になり、

両目は見開き

青い眼球は暗く湿った森の中を泳ぎまわる

第1章（3）（後書き）

マクシミリアンさん
あなたはわたしのしっているマックスですか？
そうでなかったらしつれいしました><
なつかしいものでw

森からの死神（前書き）

青年の前に突然あらわれた生物
そして青年に襲い掛かってきた
その生物の強襲を何とか避けた青年
顔からおちた数滴の血液
血液が地面についたとき、なぞの生物はその地面を
むさぼるように食らう

森からの死神

満月は天高く、暗く湿った森の上で白く、蒼く月下を照らしている
その光は、森の中には届かない
一本一本の木々の葉が、空から降り注ぐ光を遮断する
真っ暗な森、静かな森
それは、人に孤独感を与え、恐怖を与える
その中にいる一人の青年もまた、恐怖に襲われていた
暗闇だけの恐怖じゃない
目の前でうごめくなぞの生物
外見は枝に擬態した蛇とでも言えばいいのだろうか
目はなく、円形の口らしきものを持ち、体は細く、長く、ごつごつして、ところどころに小さな穴がある
今、その得体の知れない生物は青年をめがけて襲ってきてる
さっきほど、青年の血液がかかった地面を
円形に並んだ口らしきものでむさぼるように食い

体を少し、巨大化させている

「はぁ・・・はぁ・・・」

青年に重く圧し掛かる恐怖

何もせずに、その生物と向かい合っているだけで

その恐怖は膨れ上がる

「はぁ・・・はぁ・・はぁ・はぁ」

次第に呼吸は速く、心臓ははやがねをうちならす

（ここにいたくない早くどこかえあの生き物がいないところへ！）

青年の思考はそこまでしか働かない

というより、働けない

ほかの事を考えている余裕がないのだ

少しずつ、青年の足が後ろに下がり行く

「・・パキッ」

その足が木の枝を踏んでしまった！

「・・・」

青年の目はあの生物の方へ向いたまま、恐怖で目を引きつり、口はあけている

「ぁ・・あ・・あ〜〜！！」

青年は叫びながら走り出した

青年が木の枝を踏み、音を上げたときには

あの生き物の口が青年の方向に向けられていたからだ

その口が今にも飛び掛ってくるかもしれないと思ってしまったら

走ることしか今の彼にはできることはない

何もできずに走ることしか・・・・

荷物をすて、軽くなった身なりで闇雲に走り出す

（どこでもいい、どこだって。あの生き物がいないところならば・・・）

そう思いながら、彼は走っている

とはいってもこの森は暗い

下手にスピードを出しすぎると逆に自分を危ない目に合わせるかもしれない

木の根に躓いたり、池に落ちたり、もしかしたらがけの上に出てそ

のまま落っこちる可能性もある・・・

しかし、青年はそんなことも考えることさえできる状態じゃない

時々、足を木の枝や根にとられながらも全速力ではしっている

湿った森の風が青年の体を駆けるたびに

焦りと恐怖は消えるどころか大きくなる

「っつ・・・」

青年は足を見ながら、小さく悲鳴をあげた

（足が痛い。右足首・・・さっき躓いたときにひねったか・・・）

どうやら足を痛めたらしい

（でも・・・、でも・・・ここでとまったら・・・アレが・・・アレがくる・・・。離れなきゃ・・・足が壊れても・・・ここからもっと離れなきゃ・・・）

その重いだけで走りつづけた

・・・・・

・・・・

・・・

・・

・

どれくらい走っただろうか
青年は森を抜けていた
あたりに、蒼く白く光り輝く月の光がさしている
「はぁ・はぁ・ふぅ・・はぁ・・・」
青年の息は荒い
ここまでずっと走り続けてきたのだから
いためた右足に鞭をうち
痛さをこらえながら走り続けたのだ
アレから逃げるために
そう、あの生物は追ってこなかった
走ってる間ずっと・・・・
時々青年は後ろを振り返ってみたのだが、姿がないというか、見えなかった
暗闇の中を走っていたようなものだから、もしいたとしても見えなかっただけかもしれないが
一度も襲われていなかった

それでも恐怖が消えなかったからか
走り続けていた
そうしているといつの間にか森を抜けていたというわけだ

青年は森を抜けてからというもの
走るスピードを落とし、足をいたわりながらゆっくり歩いている
「っつ・・・」
また痛みのためか、小さく声が漏れた
（そろそろ・・・、やばいかな・・・）
足を引きずる用にゆっくりとゆっくりと前へ
手ごろな木の枝でもないものかと、あたりを見渡しながら・・・・
しかし、ここは森の中じゃない
そうそういい木の枝などないのだ
あるのは、大きな岩がところどころに転がっているのと、小さな枝
あとは切り株の中央から目を出した小さな新しい木
どうやら、この辺は前まで森だったようだけれど

切り開いたらしい

とわいえ、それも結構前の話のようだ

切り株からはもう新しい芽がでている

切り倒してから結構月日がたっているようだ

まぁ、切り株があるのだから、手ごろな枝があってもいいものだが・・・

しかし、ないものはない

（ないかな・・・）

すこしあきらめかけていた

あってもなくてもいいのだから

別に今すぐ必要だ！って代物でもないのだ

つまり、探し始めてというより、歩きついでに探していたが、面倒なのであきらめてしまおうってことだ

（・・・足やばいな・・・本当に・・・。どこか腰おろすか）

ちょうどいいところに大きな岩がある

その岩の一番高いところは2メートルほどある

手ごろな腰を下ろすところもちゃんとある

その岩に腰をおろすと

異変に気づいた

・・・・

地面が盛り上がりながらゆっくりと青年の方に向かってくる

「・・・・」

身が震える

さっき、変な生き物にあったばかりだ

何が出てくるかわからない・・・

青年はゆっくりと足を引きずり、岩の上まで上っていく

幸いにも岩は上りやすかったので、何かが先ほどまで座っていた場所につくまでに登り終えていた

青年はじっと目をその盛り上った地面を見つめる

「・・・・」

しかし何もおきない

あたりに静かなときが過ぎた

（なんか・・・ばかみたい・・・）

青年の思考にそうよぎった

（さっき、化け物みたいな変な生き物にあったからって怖がりすぎかな）

「・・・ふぅ」

青年がため息を漏らした

と、次の瞬間！

先ほどまで何もなかった地面から急に

長いものが飛び出してきた

それも青年の顔を狙ってきたかのように

まっすぐと飛んできた

だが、地面をみていたこともあってか

うまくかわせた

その飛び出したものはまだ上空にいた

飛び出した勢いよりゆっくりとおちいく

「・・・！？」

その飛び出したものの正体は

さっき、森で襲ってきた生物だった

森からの死神（後書き）

ニフ○ィーって
管理悪いね・・・（ぁ
ネットつながらなくなってたよ
ＰＣ光に変えるから工事もあるし・・・
ネットが・・・
と、一時的になにもできなかった・・・・
ていってもまだ工事は終わってないらしい
ってことで久々に書いたので・・・おかしい屋も知れませんｏｒｚ
あ、もとからおかしいか・・・

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6425a/

双空の誓い

2010年10月11日00時53分発行